

戦争・死刑と国家。そして国家と人民（157）

(Eメールニュース「みやぎの九条」2020年12月15日号)

小田中 聡樹

(東北大学名誉教授・みやぎ憲法九条の会世話人)

(今号は2017年12月に生じた諸問題の3回目です。原発問題と核禁条約（ICANの受賞）を取り上げます。次回から2018年1月に入ります。)

第IV章 原発問題と核禁条約（ICANの受賞）（続）

(5) 本決定の意義

①初めに、前掲甫守論文から学んだことを書くこととする。

①原発行政を担う原子力規制委・規制庁の「火山ガイド」は、“規制したくない”方向のルールであること（前掲a～c、①①）。

②伊方原発再稼働に関する福岡高裁宮崎支部決定（2016年4月6日）が、「火山ガイド」は不合理であるが噴火のリスクは社会通念上無視し得るとし立地不適としなとの判断をしたのは、行政の瑕疵を司法が取り繕ったものであること（c～e）。

③この奇妙な流れを是正したのが広島高裁決定であること。

(6) 原子力規制行政の実態

ここで私（小田中）が持った疑問は、原発規制行政を担う原子力規制委員会と新規制基準とが「原発マフィア」による原発推進の道具と化しているのではないかということである。

この疑問を解くために読んだ新藤宗幸（千葉大学名誉教授・行政学）『原子力規制委員会』（岩波新書、2017年12月）が指摘している問題点から学んだことを記す。

①第1に、原発規制を担うべき原子力規制委員会の実権が、いわゆる「原子力ドン」（原発推進政策の推進者）によって握られていたという実態である。

②第2に、原子力規制委員会の事務局＝原子力規制庁とは、単に「庶務」的事項を所

掌するだけでなく、原発政策を企画し立案する「政策」官庁であることである。

しかも原子力規制庁の幹部は警察高級官僚と経産省・通産省の出自を持っている者が大部分であること。

③第3に、「新規制基準」が、原発再稼働、老朽原発稼働延長の諾否の判断基準として、地震学者（島崎邦彦東大名誉教授）の批判に堪え得るようなものではないことである。

④第4に、原子力規制のありとしては、原子力規制委員会・原子力規制庁に代えて、中立性、独立性、公平性、公開性を持つ機関を新設し、この機関をコントロールできる民主的仕組みを司法、国会に設ける必要があることである。

⑤第5に、以上に加えて、原発推進政策を原発廃棄政策へと転換させることの重要性和ともに、この転換を支配層に促すエネルギーが原発反対の人民闘争にこそあることを強調したい。

第2節 核禁問題

(1) ①2017年12月4日、国連総会は、同年7月7日採択した核禁止条約を歓迎する一連の決議案を賛成多数で採択した（12月6日赤旗）。

オーストリア主導の決議案「多国間核軍縮交渉の前進」は、賛成125、反対39、棄権14で採択された。なお、同決議案に日本政府は核保有国と共に反対した。

ブラジル主導の「核兵器のない南半球および隣接地域」は、賛成が149ヶ国であった。

メキシコ主導の「核兵器のない世界へ—核軍縮の約束実施の加速化」は、137ヶ国が賛成した。

②他方、日本主導の「核廃絶決議案」は、賛成156、反対4、棄権24であった。同決議案は、禁止条約への言及がないことや、表現が例年より後退したことから、昨年より賛成が減り、棄権が8増えた(米英仏など核保有国の多くが賛成したが、一方、禁止条約の推進国は棄権した)。

(2) 2017年12月10日、オスロで国際的NGO連合体「核兵器廃絶国際キャンペーン」(ICAN)へのノーベル賞平和賞授賞式が行われた(12月12日朝日新聞、赤旗)。

①その式典で講演したサーロー節子さん(ICANの運動をリードした被爆者・カナダ在住)の講演概要を朝日新聞記事から引用する。

平和賞講演サーローさん 「4歳おい、肉溶けた」

10日のノーベル賞授賞式で講演したカナダ在住の被爆者サーロー節子さん(85)は、広島での壮絶な被爆体験を通じ、「核兵器は必要悪ではなく、絶対悪」と、その非人道性を訴えた。力強い言葉は出席者たちを引き込み、会場は何度も拍手に包まれた。

杖を手に演台に向かったサーローさんは、一つ一つの言葉をゆっくりと、だがはっきりと語り出した。

私たち被爆者は、70年以上にわたり、核兵器の完全廃絶のために努力をしてきました。私たちは、私たちが生きる物語を語り始めました。核兵器と人類は共存できない、と。

13歳の時の被爆体験は、会場を圧倒した。青白い閃光。建物の下敷きになり死を意識した。同級生たちの「お母さん、助けて」というかすれ声——突然「あきらめるな。隙間から光が入ってくるのが見えるだろう？そこに向かって、はって行きなさい」という声を聞いてはい出た。建物は燃え、同級生は焼け死んだ。4歳で亡くなったおいについて触れ、小さな体は、何者か判別もできない溶けた肉の塊に変わってしまいました

生々しい描写に会場は静まりかえった。多くの人が目元をぬぐった。

毎日、毎秒、核兵器は、私たちの愛するすべての人を、私たちの親しむすべての物を、危機にさらしています。私たちは、この異常さをこれ以上、許してはなりません

拍手は後半にかけて頻度を増した。

核兵器の終わりの始まりにしようではありませんか。責任ある指導者であるなら、必ずや、この条約に署名するでしょう。そして歴史は、これを拒む者たちを厳しく裁くでしょう

最後は核兵器禁止条約を一筋の光になぞらえ、被爆後の暗闇で聞いた「あきらめるな。光が見えるだろう？」という言葉を繰り返し、こう結んだ。

この光は、この一つの尊い世界が生き続けるための私たちの情熱であり、誓いなのです

会場は総立ち。拍手はすぐに鳴りやまなかった。

ただ、会場には核軍縮をめぐる溝も現れていた。5核保有国の大使は出席しなかった。開催地ノルウェーもソルベルグ首相は授賞式に出席したが、「核の傘」の下にある国々が批判された場面などでは会場の拍手に同調しなかった。この点を地元メディアは批判した。

②サーロー講演に先立って行われた I CANフィン事務局長の講演要旨も前掲朝日新聞より引用する。

核兵器の廃絶 私たちの手中に

I CAN・フィン事務局長講演 (要旨)

世界中に、人類を破壊する1万5千個もの物体が置かれています。この事実があまりに非道で、それがもたらす結末が想像を超える規模のため、多くの人々は残酷な現実をただ受け入れてしまっているようです。

このような兵器に支配されることを許していることこそ、異常です。核兵器をこの世界に定着した物として受け入れることを拒否する人々を私たちは代表しています。私たちの選択こそが、唯一、可能な現実なのです。核兵器の終わりか、私たちの終わりか。そのどちらかが起こります。

核兵器が使われるリスクは、冷戦が終わったときより大きくなっています。世界にはより多くの核武装国があり、テロリストもいればサイバー戦争もあります。核戦争を回避してこられたのは、分別ある指導力

も導かれたからではなく、これまで運がよかったからです。一瞬のパニックや不注意、誤解された発言、傷つけられた自尊心が、いともたやすく私たちの都市全体を破壊してしまいます。

核兵器を人道的観点の下に置いて廃棄していくことは簡単です。核兵器禁止条約は、未来への道筋を示しています。それは、暗い時代における一筋の光です。

核兵器の傘に守られていると信じている国々に問います。あなたたちは、自国の破壊と、自らの名の下で他国を破壊することの共犯者となるのですか。全ての国に呼びかけます。私たちの終わりではなく、核兵器の終わりを選びなさい！世界のすべての市民に呼びかけます。あなたたちの政府に対し、人類の側に立ち、核兵器禁止条約に署名するよう求めてください。(以下省略)

(3)「あきらめるな。光が見えるだろう？」ということば(サーロー節子さん)を結びとして、2017年12月分の稿を終える。

(2018・8・4丁)